

第22回「マクデブルク・テレマン音楽祭」の 画期的な成果

オペラ「オットー」プルミエ

中田千穂子

Austria

Italy

America



権力を支配する重任に耐えるオットー2世
(©Nitz Böhme)

第22回「マクデブルク・テレマン音楽祭」の
画期的な成果
あらゆる表現が渾然一体となった
オペラ「オットー」プルミエ

後期バロックを代表するドイツの大作作曲家でクラシック音楽史上最も多くの曲を作った作曲家として知られているゲオルク・フィリップ・テレマンの出身地マクデブルクで隔年で催されている「テレマン音楽祭」。第22回目の今年の音楽祭はテレマンの誕生日3月14日から23日まで約20ヶ国から約530名の演奏家を迎えて45のプログラムで催され7800枚のチケットが完売となった。今年のテーマは「二つの世代」。コンサートでテレマンの作品と並んで、テレマンの代子で今年生誕300年を迎えたカール・フィリップ・エマヌエル・バッハの作品も多く演奏された。1767年、長年ハンブルク市の音楽監督を務めていたテレマンが86歳で他界した後、テレマンのポストをカール・フィリップ・エマヌエル・バッハが受け継いだのだった。

マクデブルク・オペラ座ではオペラ「オットー」プルミエ上演で驚異的な成果が得られた。シュテファン・シュルツ指揮、アリラ・ジーガート演出、マリールイーゼ・シュトラントの舞台衣装、ヘルゲ・ライベルクのライブ絵画投影により、あらゆる表現が渾然一体となった見事なオペラ「オットー」プルミエ上演であった。

海外レポート

た。このオペラの時代は972年、神聖ローマ帝国のイタリア覇権の為の皇帝オットー2世とビザンチン王国の姫テオファーンとの結婚に際し王座奪還を狙うジズモンダとその息子アデルベルトの陰謀が絡み、互いに抑圧しあい戦いを交える内容で、まるで恐ろしい絵巻物を見ている様であるが、権力支配を保持する重臣の下に王室の次世代を担うオットー2世とテオファーンが人間として何を感じ、望み、夢見ているかが感動的に描かれた。

ロッセイ、ヘンデル、テレマンの オペラ「オットー」成立の歴史

オペラ「オットー」成立の歴史は3つある。最初はザクセン王国の皇太子フリードリッヒ・アウグストとオーストリアの皇女マリア・ジョゼフとの結婚式の祝いにドレスデンで1719年に初演された「テオファーン」と題するアントニオ・ロッセイのオペラである。ヘンデルが1723年にロンドンでイタリア語で作曲したオペラ「オットー」がある。そして1726年のハンブルクの為のテレマン版「オットー」である。ヘンデルのオペラは卓越した音楽と共に詩的、哲学的、情動的であるが、テレマンはロッセイ版に戻り、テオファーンの従者で道化役イサウルスを復活させ、ミステリー的なこのオペラに風刺的でニヒルな面を付け加えている。そしてイタリア語のレスタティーヴォをドイツ語に直し、ヘンデルのオペラでカストラートの役であったオットーはバリトンに変更され、アデルベルトはテノールの声で1オクターブ上で歌われた。

絶賛博したアリラ・ジーガートのペルゾーネンレジー

チェリストのシュテファン・シュルツ指揮ル・コンチエル

アリラ・ジーガートのペルゾーネンレジー 画家ヘルゲ・ライベルクのライフ絵画投影で 場面転換が迅速に変化

Britain

France

Germany

ト・ロレン演奏も大変素晴らしく、出演歌手7名も皆バロック音楽のスペシャリストばかりで演技も達者であったが、特に絶賛を博したのはアリラ・ジーガートのペルゾーネンレジーであった。ジズモンダ(ルービ・フーゲス)はベレンガリウス王朝出身で息子アデルベルト(コリン・ブレーザー)に王位を継がせるべく必死に戦う。彼女は母親として全く孤独で、悲しみの余りヒステリーになってしまった女である。息子はテオフアーネを本当に愛しており、この二人は大変人間的で悲劇的である。オットー(サイモン・ロビンソン)は権力支配を保持する重圧に耐えオフアーネ(演技も見事なキルステン・ブレース)との愛を全うする。そしてアデルベルトの脱獄を手引きするオットーの従兄弟マチルダ(ゾフィー・ハムルセン)、テオフアーネの従者で道化役イザウルス(エーリック・シュトゥックロツセ)、海賊エミレヌスことテオフアーネの弟(ダヴィッド・ジョン・パイク)等のエピソードも感動的に描かれた。

画家ヘルゲ・ライベルクのライフ絵画投影で 場面転換が迅速に変化

上演時間を約3時間に短縮。上演中の場面転換も玉座の間、新郎新婦の寝室、海、庭へと迅速に行われた。画家ヘルゲ・ライベルクが客席に座ってライフで描く絵がオーヴァーヘッド・プロジェクターで舞台上に投影される。画家が筆で上書きしたり、消したりして舞台の色彩や場所が素早く変化する。衣装もそれに合わせてマリー・ルイーゼ・シュトラントにより最善の解決策が編み出された。上演中、オットーとテオフアーネはしばしば存在の危機に晒される。第1幕で婚約中のオットーとテオフアーネがローマで初めて

会うことになっていた。オットーは到着が遅れている。テオフアーネが胸のロケットのオットーの肖像画と、目の前のオットー(実はアデルベルト)があまりに違うので、当惑して歌うアリア、偽の人物の場面で突如画家の筆のタッチが早まり、不気味な黒カラスが飛び交い、黒い円の中に閉じ込められていたテオフアーネが黒く塗りつぶされてしまう。

このオペラはバロックの典型的なリエト・フィーネで終わる。それまでずっと刃物で戦い、皆が互いに不信を抱いていたが、やつと結婚式の運びとなる。現代の聴衆には信じられない様な話だが、此処ではさしあたりハッピー・エンディングである。登場人物が皆玉間の階段の上に集合する前にアデルベルトが舞台中央の床の上にあった刃物を拾い後ろに忍ばせる。つまり常に刃物が素早く取り出せる様に用意されているのである。(3月15日、マクテブルク・オペラ座ブルミエ所見)



アリア "偽の人物" を歌うテオフアーネ (キルステン・ブレース)
(©Nitz Böhme)



ジズモンダ(左:ルービ・フーゲス)と息子アデルベルト(右:コリン・ブレーザー)が玉座を奪還する作戦を実行。
危機に瀕するテオフアーネ(中央:キルステン・ブレース) (©Nitz Böhme)